



監督：フランシス・ローレンス

原作：スーザン・コリンズ『ハンガー・ゲーム0 少女は鳥のように歌い、ヘビとともに戦う』

出演：トム・ブライス／レイチェル・ゼグラー／ハンター・シェイファー

ハンガー・ゲーム0

2023年／アメリカ映画
配給：KADOKAWA／157分

2023（令和5）年12月23日鑑賞

TOHO シネマズ西宮08

👁️👁️ みどころ

実写版『ゴジラ』は戦後の日本で30作も作られたが、『ゴジラ』シリーズ37作目となる最新作のタイトルが『ゴジラ-1.0』（23年）とされたのは一体なぜ？それを考えれば、『ハンガー・ゲーム』シリーズ第5作目となる本作のタイトルが『ハンガー・ゲーム0』とされた理由もわかるはずだ。

旧シリーズでは、ジェニファー・ローレンスが演じたカットニスの活躍が目立っていたが、そもそも、ハンガー・ゲームとはナニ？いつ、誰が、何のために、そんな（バカげた）ゲームのシステムを構築したの？

『グラディエーター』（00年）では、ローマ帝国時代の奴隷たちの“グラディエーターぶり”が興味深く描かれていたが、本作の主人公となる17歳の少年スノーはいかなる役割を？そして、カットニスとはまた違う魅力で本作の主人公になる、贅の少女で歌うことだけを武器とする少女ルーシーの魅力は如何に？

私にはイマイチだったが、『ロッキー』シリーズ終了後の『クリード』シリーズのように、『ハンガー・ゲーム』の後継シリーズとして続くかどうかは本作の成績次第。その興行収入と人気のサマを見守りたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆『ハンガー・ゲーム』シリーズは同名のベストセラー小説を映画化したものだが、ジェニファー・ローレンス扮するカットニスのカッコ良さが最大の要因となって（？）世界的に大ヒット！『ハンガー・ゲーム』（12年）（『シネマ29』234頁）、『ハンガー・ゲーム2』（13年）（『シネマ32』未掲載）、『ハンガー・ゲーム FINAL：レジスタンス』（14年）（『シネマ36』未掲載）、『ハンガー・ゲーム FINAL：レボリューション』（15年）と4作も作られた。しかし、『ハンガー・ゲーム0』と題された本作は一体ナニ？

『ロッキー』シリーズは6作作られた後に、『クリード』シリーズに移行した（『シネマ37』27頁）。また、2023年に公開されて大ヒットした『ゴジラ』シリーズ第37作目は『ゴ

ジラー1.0』(23年)と題されたが、『ハンガー・ゲーム0』と題された本作のシリーズ上の位置づけは如何に？

◆「ハンガー・ゲーム」が行われているのは、近未来の国パネム国。同国は大統領制だが、アメリカの大統領制とは大きく違い、独裁型の大統領制だ。そして、パネム国の首都キャピタルでは、かつて国家に反旗を翻した第12地区から12～18歳の男女をくじで選び、闘技場で最後の一人になるまで殺し合いをさせる「ハンガー・ゲーム」が行われていた。シリーズ第1作では、12地区でくじに選ばれた妹の代わりに参加した少女カットニスが、亡き父親の代わりに鍛えた弓矢の力を生かして、次々と仕掛けられる罠や国家の陰謀をくぐり抜けながら、生き残りをかけた戦いに身を投じていく姿が興味深く描かれていた。

◆それに対して本作は、カットニスがプレイヤーとしてハンガー・ゲームに志願する64年前。そしてまた、スノーが独裁者として大統領になる数十年前にあたる“前日譚”だ。なるほど、なるほど。しかして、本作の冒頭に登場する主人公は、18歳のコリオレーナス・スノー(トム・ブライス)。そのため、スノーとは少し年代を異にするジェニファー・ローレンス扮するカットニスは本作に登場しない。本作でスノーの共演者となる少女は、第10回ハンガー・ゲームに第12地区から選出された贅の少女ルーシー・グレイ・ベアード(レイチェル・ゼグラール)だ。

◆『ハンガー・ゲーム』シリーズを楽しむためには、「ハンガー・ゲーム」のシステムとその時代背景の理解が不可欠だ。したがって、第1作目の『ハンガー・ゲーム』では、それが丁寧に説明されていた。それと同じように、本作ではハンガー・ゲームの考案者の男キヤスカ・ハイボトム(ピーター・ディンクレイジ)とハンガー・ゲームのヘッド・ゲームメーカーの女性ヴォラムニア・ゴール博士(ヴィオラ・デイヴィス)を登場させて、第10回ハンガー・ゲームが各地区から選抜されたプレイヤーとその教育係がペアになってゲームを進めていくという新たな趣向が力説されるので、それに注目！

本作は第10回ハンガーゲームが“ペア戦”になることに大きな意味があるが、どうも私にはそこあたりの位置づけがイマイチよくわからないので、イライラ・・・。

◆他方、本作全体のテーマは、第12地区でペアとなった「勝利こそ全てだ」という考え方のスノーと、唯一の武器が歌だというルーシーが当初は反発しあいながらも次第に信頼関係を高め、惹かれ合っていくことだ。その過程の中に、スノーの親友セジャナス・プリンツ(ジョシュ・アンドレス・リベラ)との友情や、スノーの従姉であるタイガレス・スノー(ハンター・シェイファー)等との家族愛も絡めてくる。しかし、私にはなぜルーシーの歌がハンガー・ゲームの武器になるのかイマイチわからないし、友情や家族愛の展開

もイマイチ。そのため、シリーズ第1作ほどの高揚感を持つことができないまま、ずっと座り続けることに。

◆ハンガー・ゲームの司会者を務める男はラッキー・フリッカーマン（ジェイソン・シュワルツマン）。私が若い頃の紅白歌合戦はとんでもなく高い視聴率を誇る国民的番組だったが、今や高齢者の大晦日は紅白歌合戦から離れ、『年忘れにっぽんの歌』の方に移っている。それと同じように（?）、ハンガー・ゲームの主催目的を考えれば、全国に実況中継されるハンガー・ゲームの姿はすべての地区のすべての住民の注目を集めなければならないから、司会者は重要だ。また、実況中継用のカメラは会場だけでなく、現在のガザ地区にハマスが設けている地下トンネルと同じような（?）、闘技場の地下トンネルにも設置されているからすごい。

しかし、そもそも、なぜそんなところにプレイヤーの1人であるルーシーが逃げ込むことになるの？さらに、そもそも、第10回ハンガー・ゲームにおけるプレイヤーたちの戦いのルールはどうなっているの？そこらあたりも私にはイマイチよくわからないから、司会者の盛り上げ方を聞いていても、あまり高揚感がないまま・・・。

◆私にはあまり盛り上がらない第10回ハンガー・ゲームが展開していく中、結局ルーシーが唯1人生き残ったから、スノーとルーシーは優勝者として、ゲーム考案者のキャスカやヘッド・ゲームメーカーのヴォラムニア博士から表彰されるもの！そう思っていたが、そこで、ヴォラムニア博士の独断と偏見によって（?）、ルールが急遽変更されたからアレ・・・。しかも、戦いの過程でスノーにルール違反があったことが判明したため、スノーには厳しい処分が下されることに。

それはそれなりのストーリーとして納得できるのだが、その後の本作の展開は、私にはなお一層納得できないことに・・・。もっとも、シリーズ第1作を見れば、スノーは第74回ハンガー・ゲームが開催される近未来の国パネムの大統領として君臨していることがわかっているから、本作はその前日譚としてしっかり楽しみたい。

2023（令和5）年12月26日記